



促成ナスつる下げ誘引栽培の 増収技術の開発



写真1 つる下げ栽培の様子

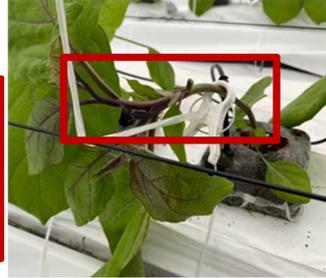


写真2 定植後からの寝かせ作業

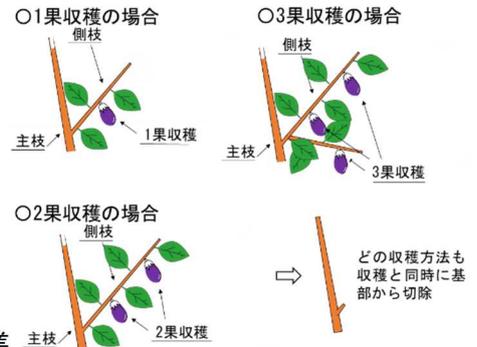


図1 側枝の整枝方法

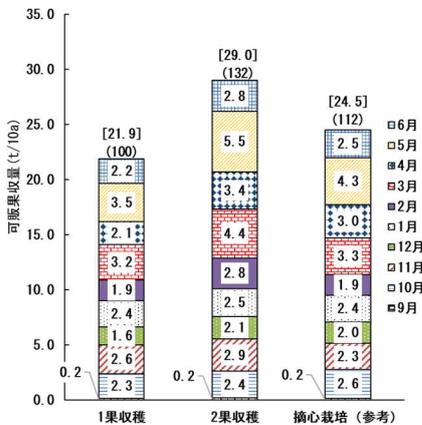


図2 栽培方法と側枝の収穫方法が可販果収量に及ぼす影響

注1) 可販果収量は JA 高知県出荷規格の A 品、B 品
 2) []は可販果収量、()は1果収穫を100とした場合の指数
 3) 摘心栽培は隣接ハウスで、主枝2本仕立て、培地上130cmで摘心し、側枝は1芽切り戻しとした。定植日及び品種、栽植密度は全区同じである。

高知県の促成ナス栽培では、炭酸ガス施用を始めとする環境制御技術の普及により、増収効果は得られていますが、大規模経営農家では整枝・収穫作業に係る労働時間の増加が課題となっています。そこで、生産現場でも試験的に導入が進んでいるつる下げ誘引栽培の収量と作業性について調査しました。

つる下げ栽培とは、主枝を摘心せずに誘引を続け、適宜つる下ろしをする栽培方法です(写真1)。試験は、2022年9月6日定植の養液栽培で6月末まで収穫し、品種には‘土佐鷹’ (台木‘エンペラドール’) を用いました。側枝で2果(4月以降は3果)

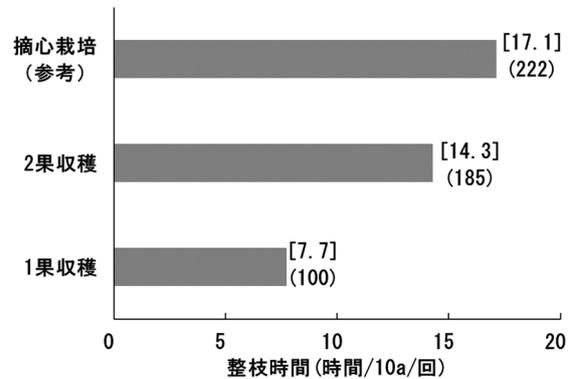


図3 栽培方法と側枝の収穫方法の違いが整枝時間に及ぼす影響

注1) []は可販果収量、()は1果収穫を100とした場合の指数
 2) 1果収穫及び摘心栽培は11/1~6/30までの調査データ
 3) 2果収穫は4/17~6/9の計8回の調査データ

収穫し基部から切除する2果収穫は、側枝で1果収穫する区(図1)に対して32%の増収となりました(図2)。また、整枝にかかる作業時間は摘心栽培に対して、1果収穫で55%削減、2果収穫で17%の削減となりました。つる下げ栽培では、栽培初期に寝かせ(写真2)などの作業が増えるため、11月までの作業時間は多くなりますが、春先の省力化技術として期待されます。

本研究は、内閣府地方大学・地域産業創生交付金「IoP(Internet of Plants)」が導く「Next次世代型施設園芸農業」への進化の助成を受けたものです。

(先端生産システム担当 篠田 翔真)

088-863-4918)